

# 4 島を渡る鳥、島に留まる鳥 —南西諸島の鳥類の多様性とその保全



水田 拓  
MIZUTA Taku

公益財団法人山階鳥類研究所／自然誌・保全研究ディレクター

南西諸島は、ユニークな固有種も多く、多種多様な鳥類が観察できる生物多様性保全上とても重要な島々であるが、小さな島々の生態系は繊細で損なわれやすい。鳥たちが直面する脅威とその保全の重要性を解説する。

## 狭い島々に多くの鳥

日本列島の地図を開くと、北海道、本州、四国、九州の主要四島に比べはるかに小さな島々が左下に点在しています。これが南西諸島です。鳥の数は198、すべての島を合わせた面積は4,648km<sup>2</sup>となっており、これは日本の島の数の約1.4%、日本の面積の約1.2%に相当します。この数字を見ると、南西諸島は日本全体からすればとても狭い地域であり、特別たくさん島の島が集まっているわけでもないということがいえそうです。

ところが、そこに生息する鳥類に目を向けると印象はずいぶん変わります。ここでは南西諸島全域ではなく、2021年に世界自然遺産に登録された4つの島、奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島のみに着目してみます。これらの地域の総面積はさらに狭く、日本の国土全体の0.5%にも達しません。しかし、そこで観察される鳥類は394種、日本全体で確認されている633種のじつに62%にもなります。面積からすると不釣り合いに多くの鳥がいるように感じられますが、これはいったいどうしてでしょうか。



写真1 奄美大島北部にある大瀬海岸。広い干潟を多くの渡り鳥が利用する

## 渡り鳥が立ち寄る島々

もう一度地図を開いてみます。今度は少しズームアウトして日本列島から東南アジアまでが入った地図を選び、渡り鳥になった気分で眺めてみましょう。たとえば日本から東南アジアに飛んでいきたい場合、鳥たちはどのようなルートを選べばよいでしょうか。飛ぶのに長けた渡り鳥とはいえ、海の上を越えていくのは容易ではありません。途中で体力を消耗してしまったり、急な悪天候に見舞われたりすれば命を落としかねません。そう考えると、鳥たちにとって



写真2 奄美大島に固有の絶滅危惧種、オオトラツグミ。夜明け前に美しい声で鳴くことが知られている



写真3 奄美大島における森林伐採の様子。地元の重要な産業の一つである林業と環境保全の両立は重要な課題である

は鳥が点々と連なる南西諸島に沿って飛ぶのが比較的安全なルートだろうと想像できます。面積に不釣り合いなほど多くの鳥が見られる理由の一つは、長距離を移動する鳥たちが南西諸島の島々を休憩や緊急避難の場所として利用するからだということです(写真1)。先に世界自然遺産に登録された4つの島で確認されている鳥類は394種と書きましたが、このうち半分以上の223種は旅鳥や迷鳥、つまり渡りの途中に立ち寄る種や台風などの強い風により迷い込んだ種です。これに対し、一年中これらの島々に住んでいる鳥類(留鳥)は47種に過ぎません。冬にのみやってくる鳥類、いわゆる冬鳥は112種、夏だけやってくる夏鳥はもっと少なく12種となっています。

## ユニークな「固有」の鳥たち

留鳥の数が47種というのは、渡り鳥の数に比べると圧倒的に少なく感じられます。しかし、南西諸島の鳥類の大きな特徴は、じつはこの留鳥にあるといえます。

ある生き物がある地域だけに住んでいることを「固有」と表現しますが、日本に固有な鳥類10種のうち、6種までは南西諸島に住んでいます(しかも4種は南西諸島だけに住んでいます)。固有の亜種を含めるとその数はもっと多くなります。亜種とは、種ほどは違わないけれど形態的、遺伝的に違いがある地域集団のことです。たとえば、奄美大島とその周辺の島々を見ると、固有の鳥は2種(アマミ

ヤマシギ、ルリカケス)と4亜種(オーストンオオカゲラ、アマミコゲラ、オオトラツグミ(写真2)、アマミシジウカラ)になります。沖縄島とその周辺の島々についても、2種(ヤンバルクイナ、ノグチゲラ)と3亜種(リュウキュウコゲラ、ホントウアカヒゲ、オキナワシジウカラ)が固有です。つまり、これらの鳥たちは世界中で奄美大島や沖縄島の周辺に行かないかぎり見ることができない非常にめずらしい種、亜種ということになります(ただし、種や亜種の分け方は分類の見直しによって変更されることがあり、ここで述べた種数、亜種数も将来的に変わる可能性があります)。実際、南西諸島はバードウォッチャーにとってあこがれの地であり、世界中から熱心なバードウォッチャーが訪れています。奄美大島や沖縄島を含む地域が世界自然遺産に登録されたのは、固有種や絶滅危惧種が数多く生息する、生物多様性保全上とても重要な島々であるからなのです。

## 南西諸島の鳥たちの脅威

渡り鳥にとっても留鳥にとっても重要な生息地である南西諸島ですが、鳥たちは南の島で平和に暮らしているかという点、じつはそうでもありません。南西諸島の鳥たちはさまざまな脅威に直面しています。もっとも大きな脅威は生息地の改変と外来種の導入でしょう。たとえば、干潟を埋め立てると渡り途中に立ち寄っていた多くの水鳥の利用環境が奪われることとなります。南西諸島のように小さな島々



写真4 毒蛇のハブ。人々に畏れられているが、その畏れが自然を守ってきたという側面もある



写真5 ハブを退治するために放たれたファイリマングース。生態系に大きな被害を与えることがわかり、奄美大島と沖縄島で駆除活動が行われている

では、1か所の埋め立ても渡り鳥に致命的な影響を与えかねません。また、豊かな森林資源を持つ奄美大島では、かつて大規模な伐採が行われ、固有の鳥を含む多くの生き物が絶滅の危機に陥りました(写真3)。森林に生息する奄美大島の固有亜種オオトラツグミなどは、生息地の減少により一時は絶滅寸前とまでいわれるほど個体数を激減させました。外来種としては、奄美大島と沖縄島で毒蛇のハブを退治するために放たれたマングースは鳥たちに深刻な被害を与えています(写真4)(写真5)。人間の手を離れ野外で生活するようになったノネコも、鳥たちにとって大きな脅威となる外来種です。

生息地の改変は、国内産の材の需要が減ったことや自然保護の機運が高まったこともあり、以前ほど大きな影響はなくなりました。国立公園の指定や世界自然遺産への登録も、鳥たちの生息地を守ることに大きく貢献しています。先に述べたオオトラツグミは近年個体数が急速に増えており、今や市街地でもその声を聴くことができるようになりました。

マングースについては、奄美大島では懸命の駆除活動の結果、2024年9月に根絶が達成され、多くの生き物が回復の兆しを見せています。沖縄島では根絶にはまだまだ達していませんが、北部のやんばる地域で対策が続けられ、固有種ヤンバルクイナは個体数が増えて分布域も拡大しています。ノネコがいる島々でも、問題解決には程遠いものの、対策は進められています。

### 顕在化した脅威、交通事故

生息地の保全や外来種の管理により、奄美大島や沖縄島などで生き物が回復しているのは素晴らしいことです。しかし、そうした対策で増えてきた生き物に、別の新たな脅威があることが顕在化してきました。それが交通事故です。

奄美群島の固有種アマミヤマシギは夜間も活動する鳥で、夜に道路上に立っていることがあります(写真6)、動きが遅く、またあまり警戒心が強くないため、よく交通事故にあいます。沖縄島のヤンバルクイナは、昼間に道路脇で食べ物を探したり、森から森へ移動するために道路を利用したりします。自動車が近づくと慌てて前を横切るため、やはり交通事故にあいやすい鳥です。さらに石垣島に住むカンムリワシは、道路上にいるカエルやヘビ(あるいは

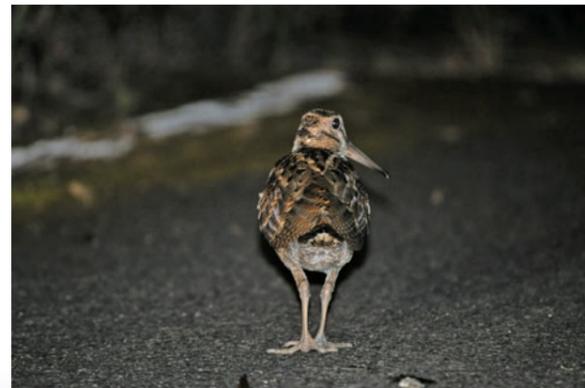


写真6 奄美群島の固有種で絶滅危惧種のアマミヤマシギ。道路の真ん中にこうして立っていることがあるため、交通事故にあうことが多い



写真7 徳之島にある道路標識。これはアマミヤマシギだが、それ以外にもアマミノクロウサギやケナガネズミ、リュウキュウイノシシなどの絵が描かれた標識がある

それらの交通事故死体)を食べるために道路に下りるので、そこで頻繁に交通事故にあうことが知られています。

いま名前を挙げた鳥たちはいずれも絶滅危惧種です。交通事故がこれらの種の個体群にどれほどのインパクトを与えているのかはよくわかっていませんが、決して無視できる死因ではありません。交通事故の実態調査は、今後進めていくべき喫緊の課題です。そうした調査の結果に基づき、道路を建設する際には生き物が交通事故にあいにくいような工夫をすることが必要でしょう。たとえば、生き物の侵入防止柵を道路脇に作ったり、生き物がくぐれるトンネルを道路の下に掘ったり、自動車の速度を低下させる減速帯を路面に設置したりといった工夫がこれまでなされています。しかしいずれも単独で劇的な効果を上げるわけではないため、さらなる対策を考えていく必要があります。人間の交通事故を減らすのが難しいのと同様に、野生の生き物の交通事故を減らすことも簡単ではありません。さまざまな立場の人が知恵を出し合って対策を考えていくことが大切です(写真7)(写真8)。

### ネイチャーポジティブに向けて

南西諸島の鳥たちの脅威となっている要因は、生息地の改変にしても、外来生物の導入にしても、交通事故にしても、すべて人間の活動が関わっています。人間が快適に生活するために自然環境に働きかけることは当然必要な行為です。一方で、それが度を越してしまうと生き物の生存に影響を与え、生物多様性を損なうこととなります。小さな島の生態系は繊細で、より大きな島に比べるとはるかに脆弱です。多くの渡り鳥が利用し、かつユニークな固有の鳥が生息する南西諸島ですが、その生物多様性はとても損なわれやすいことを私たちは自覚しておく必要

があります。

生物多様性の損失を止め、回復軌道に乗せることを意味する「ネイチャーポジティブ」が人類の大きな課題となっていますが、これを実現するためには、人間だけでなく私たちの周りに住む生き物に配慮することが必要不可欠です。南西諸島がこれからも鳥たちにとって安心して暮らしていける場所であり続けるよう、自然とのつきあい方を考えることが私たちには求められています。



写真8 奄美大島にあるトンネルの意匠。ここにもアマミヤマシギが描かれている。これ自体は交通事故対策として作られたものではないだろうが、さまざまな工夫で道路上にいる生き物への注意を喚起することが重要である